

いま私たちが 歴史に学ぶもの

我が国の生命線は“同盟”にあり

拓殖大学学長兼総長

渡辺利夫



わたなべ・としお——昭和14年山梨県生まれ。38年慶應義塾大学卒業、45年同大学大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学国際開発学部の初代学部長を経て、現在、同大学学長兼総長。60年吉野作造賞、61年大平正芳記念賞、平成元年アジア太平洋賞大賞、8年開高健賞正賞、23年正論大賞受賞。主な著書に、『成長のアジア停滞のアジア』（東洋経済新報社）『新脱亜論』（文春新書）『君、國を捨つるなかれ——「坂の上の雲」の時代に学ぶ』（海竜社）などがある。

十九世紀と現代 酷似する東アジア情勢

ソ連邦が崩壊し冷戦が終焉を迎えた時、「これで地球上から戦争がなくなった」と言った政治学者がいた。「これからは共生の時代だ」とも盛んにいわれてきたが、果たして現実はどうだろう。

特に、日本を取り巻く東アジア情勢は近年非常に緊迫の度合いを増している。そしてこの状況は十九世紀の日清・日露戦争を戦った時代、司馬遼太郎が『坂の上の雲』で描いたあの時代に酷似している。帝国列強が植民地支配を広めていた十九世紀、日本もまた常にその恐怖と隣り合わせであり、当時の支那、朝鮮、ロシアからの圧力は相当なものであっただろう。

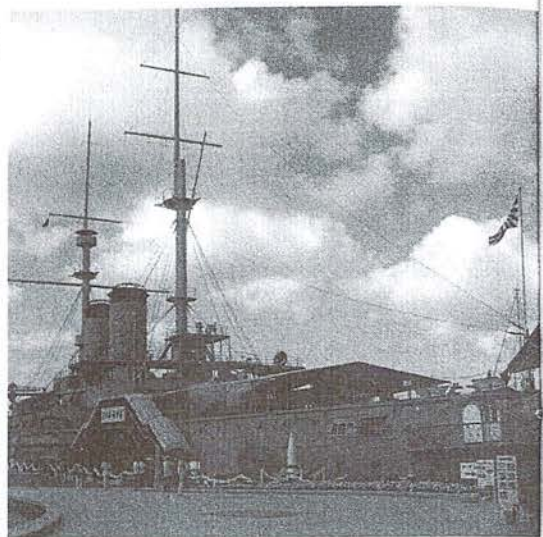
対馬海峡を越えれば、すぐそこは朝鮮である。当時、朝鮮は清国の属国であり、しかも李朝の末期で非常に国が乱れ、頻繁に政争や内乱を起こしては、その都度、宗主国である清国に派兵を要請し、これに清国が応えて鎮圧にあたり、清国が日本にまで兵を送ってくるか分からない。清国の進出を

食い止めるためにも、一刻も早く朝鮮を近代国家として独立させねばならない。これが当時の日本の指導者の偽らざる心情だった。そのための支援も行おうのだが、悉く朝鮮に裏切られてしまう。そうして日本は朝鮮の清国による支配を絶つために日清戦争へと突入していった。

幸い日清戦争には勝利したが、もう一つの脅威があった。ロシアの南下である。地図を見ればすぐ分かるように、ロシアは冬になっても凍らない不凍港を求めて南へと進出せざるを得ない。南下はあの国のDNAと言っているほどだ。いまなお、その激しい意欲を持ち続けていると見ていい。

当時、ロシアは世界最大の陸軍国家であり、その強大な軍力で南下政策を推し進め、長大なシベリア鉄道建設も完成間近であった。終着点は日本と対面する都市・ウラジオストック。開通すればいつでもモスクワから大量の兵站を輸送できる。そうなればもう日本に勝ち目はない。その直前に戦ったのが日露戦争であった。

両国の軍事力を見て、世界の誰も、当の日本人だってロシアに勝



てるとは思わなかっただろう。それほど力の差があったにも拘わらず、戦わざるを得なかった。そうでなければ植民地になる外に道はなかったからだ。

日本を取り巻く現状は 緊迫度を増している

さて、現代の東アジア情勢を考えてみると、まず支那は中華人民共和国となつて近年凄まじい勢いで膨張している。軍事費は二十余年、二桁の増加率を続け、核兵器や宇宙開発などの軍事の近代化を進めてきた。オリンピックも、万博も終了し、いよいよ経済力も日本を抜いて世界第二位となった。考えてみれば、あの国も香港島をイギリスに領有されて以来、沿岸都市の権益を帝国列強に握られ

るといふ、屈辱の近代史を歩んできた。それが鄧小平の時代から成長へと転じ、世界第二位の大国になったのだから、身の丈に合う国際的プレゼンスを獲得したい。これがあの国のナショナリズムの淵源にある感情である。南シナ海はもとより尖閣を含めた東シナ海の制海権を握りたいというのは、当然の欲求といえよう。

ロシアも北方領土に対して、メドベージェフやプーチンはいままでにない攻勢を仕掛けてきている。国力が充実するに従って伝統的な南下政策を再現し、北方領土に軍事基地をつくり、海洋国家たる意向を固めているかに見える。

朝鮮半島は南北に分かれたわけだが、北朝鮮は現在、国運をかけて核ミサイルの開発をしている。これが近々完成するであろうといわれている。さて、完成した時、彼らはいったいどこを標的にするだろうか。核大国であるロシア、中国、アメリカにこれに向けているとはないだろう。将来、統一したいと考えている韓国の領土をめちやくちやにするとも考え難い。標的は丸腰の日本であろう。核ミサイルによって日本を脅かし、取れ

るものはすべて取ってやろうという目論見なのではないか。

韓国では「反日」が制度化されている。大統領が朴槿恵氏へと代わり、彼女が親日家であるとかないとかいうより、韓国という国家が反日の旗を降ろすことは決してない。その傾向はますます強まるばかりかもしれない。

こうして見ると、いま日本を取り巻く情勢は、幕末維新を経て、日清・日露戦争に至るまでの時代と地政学的に酷似していることが分かる。しかも当時の戦闘といえど艦が主体であったが、現代は爆撃機もあれば核ミサイル、さらにはサイバー攻撃もあり得る。当時の危機よりもっと緊迫した状況にあるといえる。

日本はなぜ 坂の上の雲を掴めたのか

十九世紀と現代——。情勢が酷似しているのであれば、当時の日本はいかにその状況を打破してきたのか、その歴史を振り返る必要があるだろう。

日本は日清・日露戦争に勝利した。なぜ勝利することができたのか。我われの祖先が勇敢に戦った

ことが何よりだが、同時に日英同盟によるところも大きかった。

日英同盟の締結は明治三十五年、翌々年に日露戦争というタイミングである。なぜ当時世界の覇権国だったイギリスと極東の小さな島国の日本が同盟を結び得たかといえば、共通した敵に直面していたからだ。ロシアである。イギリスは香港島を領有して以来、清国に巨大な権益を構築してきた。ロシアが満州よりさらに南下して、自らの権益を侵すことを恐れていたのである。

日露戦争では、イギリスはこれに参戦しなかったものの、戦時公債を買ったり、新型の戦艦が売ればロシアの手に渡る前に自らが購入するなど、様々な形で日本をバックアップしてくれた。また、日の沈まない国といわれたイギリスと同盟を結んだことが日本人の誇りとなり、心強さとなり、ロシアに対する実に勇猛で果敢で迅速な攻めに繋がったのであろう。

日露戦争で勝利を収めた後、日本は約二十年にわたり豊かで穏やかな時代を迎えることになった。大正デモクラシーの時代であり、文化、芸術、芸能が花開き、三井、

任友、三菱、安田など、現代にもその名が残る大財閥が形成されたのもこの時期だ。さらに、他国に先駆けて二十五歳以上の男子であれば誰でも投票できる普通選挙法導入への運動も高まった。司馬遼太郎の言葉を借りれば、「坂の上の雲」を擱んだ時代といえる。

世界の覇権国と同盟を結んでいく時代が幸福である。これは歴史が教える教訓である。そしてこれを失った時、坂を転げ落ちるように手ひどい不幸へと転落していくことも後の歴史が証明している。

大正三年、日本は日英同盟により、第一次世界大戦に参戦することになる。しかし、日本の国土は戦場になることなく、軍事物資を生産してはヨーロッパに送り、軍需景気に沸いた。そして戦勝国の一つとなった。

もう一つ、戦場にならず参戦によって国力を伸ばし、戦勝国になった国があった。最後に参戦してきたアメリカである。第一次大戦が終わってみれば、日米二国が世界の覇権国となったのだ。

そこからアメリカが日本を敵視し、日米宿命の対立に入っていくのだが、さすがは戦略国家のアメ

リカ、この小さな国が世界の大国になった背景に日英同盟があることを見抜いた。そして、その後のすべての外交努力を日英同盟破棄に注いだのである。

「二国間同盟など古い。これから国際協調で平和を守ろう」

このアメリカの呼びかけにイギリスが応じる。アメリカの参戦がなければ、おそらくイギリスは第一次大戦に勝利することができなかった。また、大国となったアメリカとの競争を避けたい意向もあった。そうなれば当然、日本ものむしかない。

大正十一年、ワシントンで開かれた国際会議で、その後一度も機能したことがない日米英仏による四か国条約が結ばれた。これによって日英同盟は破棄。その後に関東大震災に見舞われ、以来、日本は第二次大戦での敗戦まで一気に坂を転げ落ちていった。

歴史の教訓に学ぶもの

この歴史が私たちに教えていることは、覇権国との同盟が我が国の生命線であるということではないか。

十九世紀の日英同盟は、現在の日米同盟に置き換えることができ。事実、昭和三十五年の日米同盟締結後、日本は自国の兵士を戦争で一人も失っていない。他国の兵士も殺してはいない。完全なる平和の中で経済成長に勤しみ、経済大国になった。こういう時代が六十七年も続いた国は世界に例がない。しかし当の日本人の感覚がマヒしてしまい、これが当たり前と思ってケチをつけ出す始末である。アメリカという同盟国の信頼を平気で裏切ってきたのが、これまでの民主党政権下三年半だったのではないか。

その象徴が普天間基地移設問題であることは周知だ。普天間基地移設はアメリカにとって単なる基地移転にとどまる話ではない。冷戦崩壊後、世界に横行する地域紛争やテロに柔軟に対応できるトランスフォーメーション(再編)するというアメリカの大きな国家戦略であり、しかもそれを限られた財政の中でやろうとしている。

その第一段階が普天間基地の移設である。これが土壇場でひっくり返されたものだから、アメリカも相当苛立っている。この同盟関

係の揺らぎを察して、中国は尖閣に、韓国は竹島に、ロシアは北方領土に一気に圧力をかけてきた。これが昨年の一連の領土侵犯の実情であろう。これらの圧力にどう対処するのか、いまだ日本の戦略は見えてこない。にも拘わらず、非常に重要なパートナーであるアメリカとの信頼が揺らぎ、いまだ日本は非常にきわどい状況にある。

歴史学者の中には「日英同盟破棄なかりせば、日本は第二次世界大戦敗戦という塗炭の苦しみを味わわずに済んだかもしれない」という主張の人が数少ないが、私もその一人だ。日英同盟破棄後、日本は亡国皮一枚のところまで転げ落ちたのである。後世の子孫が「あの時、日米同盟破棄なかりせば……」というようなことになってはならない。

そのために日米同盟の重要性を見直すことが大切である。また、アメリカに守ってもらうだけでなく、せめて集団的自衛権を行使できる国にならなければ、真の同盟国として関係を深めていくことはできないだろう。

いまこそ私たちは歴史の教訓に学ぶべき時である。